霊長研解体（３）

小嶋祥三

以下、前回の続きである。大学は研究者、学者の集まりだ。湊総長が連携不足を主張するのなら、それを「事実」で示すべきだろう。

研究面の「連携」についてだが、それを事実で示す方法を提案したい。例えば、この数年の間に霊長研で発表された論文の著者たちの中に、異なる分野、部門に属する研究者がいるか調査するのはどうか。もし連携が取れていないならば、著者らの所属は一つの部門、分野に限られるはずだ。これを京大の理学研究科の生物学専攻の各教室の論文と比較してほしい。もし、共著者が複数の部門、分野に属する霊長研の論文が、生物学専攻のそれより少ないのなら、すなわち、統計的検定にかけて有意な差があるなら、総長のいうことは正しいだろう。しかし、わたしには霊長研の研究が連携を欠いているとはとは思えない。

研究費の使用に関して連携を欠いていたのは事実だろう。それは思考言語分野と霊長研事務、野生動物研究センターの研究者とセンター事務の間の連携で、霊長研の他分野は無関係である。大学は松沢の研究費の問題を 2017 年には認知できたはずだ。その時は山極前総長で、湊現総長も執行部にいたと理解している。当時の大学執行部と事務部の間も連携を欠いていたのではないか。責任を霊長研の他分野に負わせるのは合理的でないと思う。